

マタイによる福音書5章33-37節 「誓ってはならない」

### 1A 偽りの誓い

1B 御名をみだりに唱える罪

2B 言葉の確かさの保証

### 2A 真実を語る

1B 「誓ってはならない」の真意

1C 宣誓をすることについて

2C 上位への誓い

2B 「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」

1C 真っ直ぐな応答

2C イエスのご性質

### 本文

マタイによる福音書5章を開いてください、山上の垂訓シリーズはマタイ 5 章 33 節からになります。イエス様が、誓いについて教えられます。「33 また、昔の人々に対して、『偽って誓ってはならない。あなたが誓ったことを主に果たせ』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。34 しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。天にかけて誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。35 地にかけて誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムにかけて誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。36 自分の頭にかけて誓ってもいけません。あなたは髪の毛一本さえ白くも黒くもできないのですから。37 あなたがたの言うことばは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』としなさい。それ以上のことは悪い者から出ているのです。」

私たちはずっと、イエス様が「5:20 あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさってなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。」と言われたことに基づいて、イエス様がパリサイ人や律法学者が教えていることと対比させ、「わたしはあなたがたに言います」と権威をもって教えられます。それが天の御国に入ることのできる義ということです。イエス様が律法とは異なる教えを垂れたのではなく、むしろ、律法の本来の意図を強く確認するようにイエス様は、語っておられます。これまで、殺してはならない、姦淫してはならないという彼らの教えについて、イエス様が語られました。

そして今日は、「偽りの誓いを立ててはならない」ことについて見ていきます。一見、イエス様の言われていることに、流れが内容に見えるかもしれませんが。けれども、彼らが殺してはならない、と教えている時、また姦淫してはならないと教えているとき、イエス様は一つの問題を見ていました。

それは、「彼らは、偽っている」ということです。神は真実な方で、殺してはならないと言われた時に、心を尽くして、自分のすべてを尽くして神のその思いに応えなければいけないのに、彼らは自分たちに都合の良いように解釈し、それで律法を守ったようにさせていたのです。殺してはならないと神が言われた時に、神を畏れて、相手の兄弟を敬って、つまり兄弟を愛して、それで憎むことさえも罪とみなして、それを避けるという姿勢が必要でした。ところが、単に物理的に殺人の罪を犯さなければよとして、憎しみや恨み、また殺意についてはそのままにしていたのです。姦淫も同じで、心の中で情欲を抱いて女を見ていたのに、それでも手を出さないからそれでよとしました。そして、そこにモーセの離婚状についての律法まで持ち出して、その情欲を満たすべく姦淫の罪を合法化させるところまで持って行ったのです。その根底に、「偽っている」ということがあるんですね。ここで言っている偽りとは、単に言葉で嘘をつくという意味ではなく、真実に生きていないという意味、偽って生きているという意味です。

そこでイエス様は、彼らが偽って誓ってはならないと教えていることに触れます。偽ってしまう問題です。教会に対して、パウロは、「エペ 4:25 ですから、あなたがたは偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。私たちは互いに、からだの一部分なのです。」と言いました。私たちが神を畏れて、互いに真実を語るというイエス様の教えに目を向けて見ましょう。

### 1A 偽りの誓い

初めに「33 また、昔の人々に対して、『偽って誓ってはならない。あなたが誓ったことを主に果たせ』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。」とイエスさまは言われます。この昔の人々というのは、代々言い伝えられてきた律法のことです。口伝律法と言いますが、その言い伝えを守るようにパリサイ派、律法学者は教えてきました。

### 1B 御名をみだりに唱える罪

この言葉に近い律法はあります。まず十戒における第三戒です、「出 20:7 あなたは、あなたの神、【主】の名をみだりに口にすることはならない。【主】は、主の名をみだりに口にする者を罰せずにはおかない。」主の名によって誓っておきながら、それを行わないのであれば、主の名に対する毀損であるということです。例えば、「主の名によって誓います、明日、必ずあなたのところに行きます。」と言ったとして、それで行かなかつたら、主のお名前を使ってこの人は嘘をついたということになり、主の御名に傷がつきます。

レビ記 19 章 12 節において、このように主は命じられました。「レビ 19:12 あなたがたは、わたしの名によって偽って誓ってはならない。そのようにして、あなたの神の名を汚してはならない。わたしは【主】である。」神の名が汚されてしまうと言っていますね。そして、申命記でこうあります。「23:21-23 あなたの神、【主】に誓願をするとき、それを遅れずに果たさなければならない。なぜなら、あなたの神、【主】は必ずあなたからそれを要求し、こうしてあなたが罪責を負うことになるか

らである。誓願をやめる場合、あなたに罪責は生じない。あなたの唇から出たことを守り、あなたの口で約束して、自分から進んであなたの神、【主】に誓願したとおりに行わなければならない。」誓うのであれば、それを行いなさい。行わないのであれば誓願を取り下げなさい、ということです。

## 2B 言葉の確かさの保証

そもそもどうして、誓いを立てるのでしょうか？それは、自分の言っている事は真実なものだ、だから人々が疑う余地をなくすために言うものです。「ヘブ 6:16 誓いはすべての論争を終わらせる保証となります。」とあります。私たちが、自分のしようとしていることに疑いがかけられているとしますね。そうすれば、「そんなことはない、絶対に必ずするから。」と言いますね。けれども、それでも何も保証するものがありません。それで、「主の御名によって誓います」と言えば、そこで聞いている人々は何も反論できなくなります。これが誓いです。すべての論争を終わらせるものです。

クリスチャンの間では、もう何の反論も許さない文句があります。「主が語られたからです」「主が導いているのです」と言われると、他の人々は言い返すことができなくなります。主がそうされているのであれば、仕方がない。もうそのようにすると決めたのであれば、周りの人たちが認めざるをえません。そういった力を、「誓います」という言葉には含まれるのですね。

その発した言葉が必ずその通りなる、あるいはその通りにするということは、私たちに安心感を与えます。神ご自身が、ご自分の名によって誓ったことがあります。「ヘブ 6:13-15 神は、アブラハムに約束する際、ご自分より大いなるものにかけて誓うことができなかつたので、ご自分にかけて誓い、「確かにわたしは、あなたを大いに祝福し、あなたを大いに増やす」と言われました。このようにして、アブラハムは忍耐の末に約束のものを得たのです。」アブラハムは、その多くの子孫を、自分の生きているうちは見ませんでした、今は見えています。まず百歳だったのにもかかわらず、九十歳の妻サラから子イサクが与えられました。そして、その子からヤコブが、ヤコブから十二人の息子が与えられました。そして十二部族が始まります。そしてイスラエル人だけではなく、アブラハムの信仰の歩みに倣う異邦人も、霊的にアブラハムの子孫とされました。これだけ多くの子孫が与えられ、アブラハムの子孫には、キリストも現れました。そのキリストにあって全ての信じる者たちが祝福を受けるようになりました。

けれども、老齢になっても一向に生まれてこないのですから、不安になりますね。しかし、主がご自分の名にかけて誓われたのです。その言葉が確かであること、真実であることを神ご自身が確認されました。まだそれを目で見ない時も、主が誓われたのだからということで、信仰をもって忍耐して待つことができます。ですから、神に似せて作られた人間も、自分がこのようにすると言ったことばを、確かにその通りにするというので、私たちの間に真実と平和の実が結ばれます。私たちにとって身近な誓いと言えば、結婚の誓約ですね。

## 2A 真実を語る

### 1B 「誓ってはならない」の真意

しかし、「34 **しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。**」とイエス様は言われます。言葉の表面だけを見ると、まるで正反対のことを言われているように見えますね。そこで、イエス様は本来の、神の命じられている、偽って誓ってはならない、の意義をはっきりと語られるのです。彼らは、その「**あなたが誓ったことを主に果たせ**」と教えていたことでさえ、実は自分自身を偽っていたことをイエス様は教えておられます。

### 1C 宣誓をすることについて

イエス様は続けて言われます、「34b **天にかけて誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。35 地にかけて誓ってもいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムにかけて誓ってもいけません。そこは偉大な王の都だからです。**」

彼らが行っていたのは、こういうことです。神の名によって誓ってそれでそれを行わなければ、罪に問われます。けれども、神の名によってではなければ、その誹りを免れるということなのです。だから、天にかけて誓いますと言っていました。また、地にかけて誓いますとも言いました。それから、エルサレムにかけて誓いますとも言いました。こうやって、神にかけて誓ったのではないから、だからそれを実行しなかったとしても、罪に問われることはないとしたのです。これは、屁理屈ですね。イエス様は、「天は神の御座があるところ。だから、神の名にかけて誓っているのと同じこと。地にかけて誓ったところで、神がそこを足台とされている。そして、エルサレムにかけて誓ったら、そこには偉大な大王、神ご自身が住まわれるところ。だから、すべて神にかけて誓っていることだ」と言われているのです。

つまり、字面だけを追って、自分の言葉に対して真実になるという意味合いをすつとばして偽っていることをイエス様は指摘されています。キリスト教会の中では逆の過ちを犯している人々がいます。それは、誓いは一切だめだと教えることです。結婚の誓いがありますね。それもだめで、裁判所においては、法廷で証人が真実を話すことを宣誓しますが、それもだめだと考える人々もいます。これもまた、字面だけの解釈です。なぜなら、神ご自身が誓いをかけてアブラハムに約束されました。誓いそのものをしてはいけない、ということではないのです。その誓いの意味の意味している所を、明らかにされているのです。

### 2C 上位への誓い

興味深いことに、こんな誓いもしていたのですね。「36 **自分の頭にかけて誓ってもいけません。あなたは髪の毛一本さえ白くも黒くもできないのですから。**」先ほどヘブル書を引用した時に、「神は、アブラハムに約束する際、ご自分より大いなるものにかけて誓うことができなかつた」とありました。誓いというのは、このように自分よりも上位にあるものにかけて誓います。それで彼らは、天

にかけて誓うであるとか、そういうことを言っていたのです。ところが、これは滑稽ですね、自分の頭にかけて誓う、確かに自分の一番、上にある部分ですね！でも、なんと虚しいことか、自分の頭の髪の毛に対して、白髪にすることも、黒に戻すこともできないのですから。

## 2B 「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」

そこでイエス様が言われます、「37 **あなたがたの言うことばは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』としなさい。それ以上のことは悪い者から出ているのです。**」なぜ、イエス様が「悪い者から」と言われているかと言いますと、悪魔が偽りの父だからです。偽ることは、悪魔から出ていると言っています。「ヨハ 8:44 悪魔は、偽りを言うときに、自分の本性から話します。なぜなら彼は偽り者、また偽りの父だからです。」イエス様がこの言葉を話した時、ユダヤ人たちはイエス様を殺したいほど憎んでいました。けれども彼らは、「私たちの父はアブラハムです」そして、「私たちにはひとりの父、神がいます。」とも言ったのです。もし神を父としているのであれば、憎しみや殺意は抱かないのです。それなのに、自分の父は神だと言いながら、殺意を抱いているところに、彼らは自分を偽っていたのです。その偽りは悪魔から来ている、ということです。

それで、イエス様は誓うことによって偽るのであれば、それは悪い者から来ていると言われていきます。厳しいですね、私たちはいつも嘘をついてその場をしのごうとしますが、その背後には悪魔が働いているということを私たちは知る必要があります。嘘があると、そこには人々との結びつき平和が壊されます。秩序が無くなります。争いが起こり、そうやって神の国ではなく、サタンの思う壺の状態に陥るのです。

## 1C 真っ直ぐな応答

そして、「『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』」であります。言葉数を少なくして、神を畏れて、真実だけを語りなさいということです。「本当にあなたは、そのことをやるの？」と尋ねられたとして、「はい、必ずやります。天にかけてやります。」と誓ったとします。そして、それを行わなかったら偽りになるのですから、むしろ言わないほうが良いのです。そして、その尋ねられたことに対して「はい」と答えればいだけ。そして、それをしないのであれば、「いいえ」なのです。それが、「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」の意味です。私たちは神の前で、また人の前にも偽ることなく、真実を語らなければいけないということです。

ソロモンが伝道者の書の中で、似たようなことを語っています。「伝 5:4-7 神に誓願を立てるときには、それを果たすのを遅らせてはならない。愚かな者は喜ばれない。誓ったことは果たせ。誓って果たさないよりは、誓わないほうがよい。あなたの口が、あなた自身を罪に陥らせないようにせよ。使者の前で「あれは過失だ」と言うてはならない。神が、あなたの言うことを聞いて怒り、あなたの手のわざを滅ぼしてもよいだろうか。夢が多く、ことばの多いところには空しさがある。ただ、神を恐れよ。」ことばが多くするのではなく、その言葉に真実が含まれるように、まず神を畏れな

い。そして言葉数を少なくしなさいと勧めています。イエス様はその言葉の数が少ないのを、「はいはい、いいえはいいいえ」にしなさいと言われていました。

## 2C イエスのご性質

山上の説教で特徴的なのは、イエス様ご自身がその説教で教えられたことを全て行われたということです。イエス様は死刑に処せられる時、多くのことを語られませんでした。真実だけを語られました。いろいろののろしれましたが、ののしりかえさず、語らなければいけないことだけ語られました。カヤパの前で、ご自身がキリストであることを、はっきりと言われました。この方にこそ、誓いの本当の意味、真実な言葉がありました。それで主は、ラオディキアの教会に対してご自身を現わす時に、こう言われています。「3:14 アーメンである方、確かに真実な証人」イエス様は、アーメン、その通りという意味です、そして確かに真実な証人であられます。父なる神を確かに真実に表わされました。

そして、弟子たちに対して、その真実さをもって契約を結んでくださったのです。「ルカ 22:19-20 それからパンを取り、感謝の祈りをささげた後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられる、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。」神は、預言者エレミヤを通して、新しい契約を与えてくださいました。そして、イエス様をご自身の血を流して、新しい契約を結ばれますと言ってくださいています。その血によって、罪のすべてが赦されます。主は一切の罪を忘れてくださると約束されています。その赦しは、主が血を流されたところで確かなものとなり、私たちが安心することができるのです。